

2018年3月26日から28日まで、宮崎県宮崎市・延岡市および日向市で現地調査がおこなわれた。大阪では、桜の咲き始めだったが、温暖な宮崎ではちょうど満開であった。

1日目は、宮崎市において、『八紘一宇』を考える会の方々のご案内で、フィールドワークを行った。宮崎市を見下ろす小高い丘の上に、宮崎県立平和台公園がある。その木立から突き出るように、塔のような建造物がみえる。これが、「八紘一宇」の塔である。

1940年、いわゆる「紀元2600年」記念祝典のために、この塔は建造された。礎石は、日本各地にとどまらず、当時の植民地や占領地など海外からも400個近くが送られた。戦地の最前線にある石を送るように命じることで、この塔の造営は「戦意高揚」を進める装置の役割を果たしたようだ。

敗戦後、「八紘一宇」の文字や荒御魂の像、由来碑文などが占領軍の命により撤去されたが、塔そのものは保存されていた。1964年東京オリンピックの折、聖火リレー第2コースの起点として、平和台公園が選ばれた。当時の知事が「五輪の精神と『八紘一宇』の精神は同じだ」という県民の一部の人たちの意向をうけて「八紘一宇」の文字を復元した。さらにその後、由来碑の跡に「友好諸国から寄せられた切石」「『八紘一宇』の文字が永遠の平和を祈念して」といった文言を含む説明板が掲示された。以来、観光ガイド等では「平和の塔」として紹介されるようになったという。

『八紘一宇』を考える会のみなさんは、資料発掘や礎石の現地調査などの研究をすすめてきた。その成果は、『新編 石の証言』にまとめられている（一般の書店や、平和台公園の売店で購入できる）。p230からp262では、どの位置にある礎石がどこから送られてきたものであるのか、詳細な調査資料が掲載されている。また、英語版パンフレット"What is the Hakko ichiu or "Eight Corners of the World Under One Roof" Tower?"も発行されている。

史実をぼかして「平和の塔」と呼ぶよりも、戦争の遺跡として学びの場とすることで平和について考える場にするほうがずっと役に立つのではないかと、会のメンバーの方はおっしゃっていた。

2日目は、延岡市に移動した。かつて、「と場」と火葬場、養鶏や博労のムラであった市内の被差別部落で、フィールドワークと聞き取りをおこなった。火葬場は移転して久しく、今は部落の中にはない。「と場」は、公設の施設を民間企業が借りるかたちで、現在も稼働している。午前中は、「と場」の見学をさせていただいた。この「と場」では、牛を割って「枝肉」にするだけにとどまらず、部位ごとにカットし箱詰めして出荷するところまで一貫しておこなわれていた。牛を割るところも、かなりの至近距離でみせていただいた。私が部落問題の研究をはじめた1990年代後半、大阪ではO157が問題になり、またその後BSEが社会問題化したこともあって、「と場」の見学は、遠くから眺めることしかできなくなっていたので、これほど近くでみるのは初めての経験であった。

午後は、支部の方や、宮崎県内で同和教育にたずさわる先生方からお話を伺った。お話は、昔のムラの様子から、現在の子どもたちの状況まで多岐にわたり、ここですべてを書くことはできないが、印象深かったエピソードを記しておきたい。

1977年に火葬場が移転したことで、ムラのまわりの農地は一気に住宅地に変わり、部落外からの人々がたくさん住むようになった。ムラは劇的に変わったという。しかし、火葬場はムラの人々にとって、思い出の場でもあった。現在50代の方のお話では、子どもの頃、火葬場の前は車が入れるように舗装がしてあり、隣には駐車場があった。さらにそのとなりには「と場」があった。駐車場はそれほど広くなかったが、植え込みをまたぐかたちで野球場として使ったり、舗装された部分でローラースケートしたり、夏には肝試し会場に使うなど、子どもたちには遊び場であり、かつ親たちが働く場所であったという。今、その場所は、同和対策によって、「本物の」運動場になっており、今も野球などに使われている。

この日は夕食に、「と場」から出荷された精肉とホルモン、そして養鶏場で朝ひいた鶏をいただいた。

最終日は、日向灘の美しい景色をみながら日向市美々津に向かう。美々津は、船による物資輸送がさかんであった時代の美しい街並みが残っている港町である。ここは、カムヤマトイワレビコノミコト（のちの神武天皇）が「東征」のために船出したという「お船出伝説」の地とされている。ここにも「紀元2600年」に作られた記念碑がある。「日本海軍発祥の地」の碑である。『八紘一宇』を考える会のみなさんに、「八紘一宇」の塔とあわせてこちらも見学してほしいと勧められた。部落問題を研究している人にとっては、「紀元2600年」といえば、奈良の橿原神宮の拡張工事のために、被差別部落が強制移転させられたという事件を思い起こさせる。この強制移転は、小説『橋のない川』でも扱われているが、日本全国で、戦争をする「気運を高め」て、積極的に戦争に参加させる雰囲気があったのだろうかと思像した。

\*\*\*

人権問題研究センターの所長を退職され名誉教授になられた後も、特任教授や特任研究員としてセンターに残って研究を続けてこられた野口道彦先生は、2018年3月末をもって、研究員の任務も終えられ、「本格的に」ご退職された。本センターの前身である同和問題研究室では、1999年にも宮崎県に現地調査（当時は、現地研修と呼んでいた）に行かれたそう。野口先生には、19年前の様子を思い出していただきながら、今回の現地調査をすすめていただいた。